

オリンピック博物館とクーベルタン

伴 義 孝

「スポーツで世界平和の実現を！」とは絵空事だろうか。1894年6月23日、国際オリンピック委員会（以下、「IOC」という。）が、ともかくこの理念のもとに、フランス人のピエール・ド・クーベルタン男爵（1863-1937）によって創設された（写真1）。

IOCは、現在ではスイスのローザンヌに本拠地をもち、つぎの「オリンピック運動の4大理念」を標語にして活動を続けている。

スポーツの本質である身体的、精神的資質の向上を促進する。

スポーツ教育をとおして若人の相互理解と友情を深めて、もって、平和な世界を建設する。

オリンピック運動を世界に広め、もって、国際親善につとめる。

4年毎に開催するオリンピック大会に、世界のスポーツ人を集める。

「オリンピック博物館」は、IOCがオリンピック理念のメッカとして開設したもののだが、美しいローザンヌの町並みに調和して気取らぬ風情で、観光客や専門家をとわず、世界各地からの来館者を待っている（写真2）。所在地は、ローザンヌ駅から、ゆっくり歩いて5分、駅前のRuchonnet大通りのハウス番号「18」。館内は、1階が「博物館」で、2階が「図書館」と「研究室」、3階が「資料サービス室」と「会議室」になっている。

建物はいたってこじんまりしていて、海をこえて日本からわざわざやってきたのに、なーんだこんなものかと、一見、がっかりさせられるが、内容はやはり重厚である。じっくり時間をかけさえすれば、必要な資料を満足できるまで掘り起こすことができる。もちろん、クーベルタンとオリンピックに関するものならすべて揃っている。

1922年、IOC本部は、ローザンヌ市の厚意で、市中の公民館「Mon Repos 平和の館」の4階の1部屋の寄贈を受けて、そこに移転。後日、さらに4階全部が寄贈され、その一部に、1915年の設立計画案採択以来の念願であった「オリ



写真 ① クーベルタン胸像

（オリンピック博物館にて）

ンピック図書館・博物館」が本格的に開設されることになる。その4階は、爾来、クーベルタンが生活してきた寓居で、当時のコレクションは、すべて、彼みずからが所蔵していたからにはかならない。

残念なことに、この図書館と博物館は1970年に休館となる。世界各国から寄贈を得て、増えるばかりのコレクションが収容しきれなくなったからであった。

現在の施設はこうした経緯のもとに、1982年6月23日、市街地に再び開館したもののだが、いまではこの施設も手狭になって、コレクションの大半が別館の倉庫にしまいこまれている。また、苦肉の策として、市中の諸施設の一角に展示場を借りて、公開している。館内の展示場では、1896年アテネ開催の第1回近代オリンピ

ック以来、歴代の夏期大会並びに冬期大会のディスプレイが定期的に開催され、すべての来館者を楽しませてくれる。また、古今東西の貴重なスポーツ芸術品を多数所蔵し、加えて、古代オリンピック関係資料も豊富にある。一方、蔵書には、バックナンバーの揃った各国あるいは類型別の関係雑誌も多数あり、調査資料として大いに重宝がられている。

オーディオ・ビジュアルサービスも完備していて、専門家にも、一般客にも人気が高い。もちろん、専門的な研究者には、「資料案内サービス」があり、数名の専門家が対応してくれる。展示されていない膨大な資料、貴重図書、古文書は資料案内サービスを利用すれば、丁寧に説明してくれた上で、閲覧できる。当地はフランス語圏なのだが、館員のほとんどが流暢な英語も話し、英語での対応にはこまらない。

オリンピック理念は市井の人びとにとってこそ生活信条にすべきだ、とクーベルタンは折りに触れて説いてきた。その意味で「オリンピック博物館」の役割は大きい。IOCもこの点を認識して、加盟各国が自前のオリンピック博物館を設置する運動を進めている。そのため「オリンピック博物館」は、主要行事の一つとして、「国際シンポジウム：スポーツ博物館経営」をローザンヌで毎年開催している。世界のスポーツ仲間とともに、「みんなのオリンピック理念センターとしての博物館づくり」のノウ・ハウを研鑽するためだ。

IOC自らは、現在、21世紀に対応できる画



写真 ② オリンピック博物館



写真 ③ 建築中の新オリンピック博物館のデッサン
（『オリンピック・レビュー』1989年7月号の表紙より）

期的な構想のもとに、教育・研究施設も完備した「新オリンピック博物館」（写真3）の建設を進めており、その開館日を1993年6月23日に設定している。「新オリンピック博物館」は、あの風光明媚なレマン湖畔のウーシー港地区の、見事に整備されたオリンピック公園内にできあがる。訪れば、眼前の湖面に遊び白鳥も世界の人びとを平和に迎えてくれることになるだろう。

クーベルタンは、きわだって、先見性のある人物だった。しかも「100年先」が読める人物といえは歴史的にも稀であろう。彼は、商業主義に毒されつつある現在のオリンピックを予見していたし、「みんなのスポーツ」が主流になることも予見していた。いや、大衆スポーツの興隆こそが彼の究極的な狙いであったといってもよい。彼は現実主義者であると同時に、ロマンチストでもあった。だから、主知主義から派生した、見えすぎる矛盾を浄化するために、スポーツによって人間に生きる力と希望を与えようと闘ったのである。

クーベルタンは「スポーツは純粹、それを悪用する人間に罪がある」とも書き残している。昨今のIOCの活動やオリンピック関係の話題はどうも金権主義に墮してるように思われる。いまこそ、21世紀のために、「オリンピック運動」が果たしてきた歴史的事実を正当に評価し、その理念を再確認すべきであろう。その考察の現場が大学であってもよい。大学の協力こそは、クーベルタンが100年前に希求していたことにほかならない。